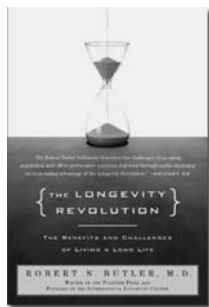


## 必読の一冊

## 『長寿革命：長寿をもたらす恩恵と課題』

ロバート・N・バトラー 著



マサコ・オサコ

ILCグローバル・アライアンス事務局長(在米国)

2008年3月に刊行されたロバート・N・バトラー著『長寿革命：長寿をもたらす恩恵と課題』が、今アメリカで注目を集めている。

4月に全米で放映され、バトラー博士も特別出演したテレビ特番『150歳まで生きる—それは可能か』は、高名なメディア・パーソナリティのバーバラ・ウォルターズの目に本書がとまったことがきっかけで作られた、と言われている。

元大統領夫人ロザリン・カーターは、書籍の帯で「バトラー博士の経験と専門知識によって、わが国においてきわめて重要になりつつある問題に対して、本書は有意義な貢献をするものである。バトラー博士の活動は、この分野におけるジミーと私の長年の活動の触発剤となってきた」とコメントしている。

この本に対して、これほど大きな注目が集まるのはなぜだろう。

世界的に著名な82歳の老年医学者であり、アメリカ高齢者の権利とニーズの向上に多大な貢献をし、「老年学の父」と言われてきたバトラー博士のライフワークの集大成である本書に、人々はまず圧倒される。

そして600ページを超える本書を読み終えた時、読者は博士の老年学・老年医学に関する百科事典のような膨大な知識や鋭い洞察に、改めて目を見張ることになる。

## 著者ロバート・N・バトラー博士

バトラー博士はILC米国の理事長であり、20年以上にわたりニューヨークのマウントサイナイ医学センターの老年医学部教授を務めている。

1975年から7年間、博士はNational Institute on Aging(国立老化研究所)の創設責任者を務め、1976年には著書「Why Survive? Being Old in America」邦題「老後はなぜ悲劇なのか—アメリカの老人たちの生活」(メチカルフレンド社1991年)により、ピューリッツァー賞を受賞した。

博士は多数の書籍や研究書を通じ、また諸々の会議において、或いはマスメディアを通じて高齢社会の問題点と、そして何よりも高齢者の持つ可能性について、社会に向けた発言を行ってきた。

博士は2003年に権威あるハインツ賞\*1を受賞したが、その受賞理由に「高齢者の権利とニーズを向上させ、米国高齢者のQOLの改善に寄与した」と述べられているとおり、彼の活動は単に高齢化に関する学問領域をはるかに超えるものである。

## 本書について

本書の主要な目的は、寿命の伸びと人口高齢化の原因、課題、それらへの対応策を明らかにし、人生後期についての現在の仮説を再検証するものである。バトラー博士は「私は十分な知識に支えられた市民活動こそ意義あるものと信じるので、本書の刊行がどのような市民活動を起さねばならないのかを示し、また活動が正確な知識に支えられることの一助になることを望んでいる」と語る。

また博士は高齢人口の増加による保健、経済、社会的な影響を検証している。寿命の伸びにより、多くの取り組みねばならない課題が生ずる。慢性病に対する、より効果的で安価な治療法の発見、持続可能な医療システムの構築、年齢差別に対する法的擁護などについて、データに基づいた所見が述べられている。

さらにバトラー博士は、アメリカ社会が長寿(Aging and Longevity)について、NASAのアポロプロジェクトに匹敵するような大規模な科学的研究をすれば、これらの課題に十分対処できるようになるだろうと語る。

バトラー博士は本書を通じて、長寿革命によってもたらされる課題に関する国民全体の議論が促されることを希望している。博士は、ベビーブーマーは不幸な高齢期を迎える可能性と、アメリカにおける加齢の

定義の変革という新たな可能性との分岐点に遭遇する世代である、と考えている。

アメリカが長寿社会と正対し、そのリスクや可能性に対する思慮深い分析予測や計画を立てることなく、(メディケアの財政危機のような)危機が表面化して初めて対策が議論されるような傾向には、強く反対している。

バトラー博士は「長寿革命の課題への取り組みを成功させるには、いくつかの保守的な考えを問い直すことが必要である」と語る。例えば、

- 出生率が低下すると困ったことになる。
- 福祉国家(Welfare-state)のモデルを使った社会福祉は維持できない。
- 人口高齢化は医療支出増大の原因となる。
- 高齢労働者は生産性が低い。

本書を読み終えた多くの読者は、高齢化問題について十分理解が深まったことに気づくだろう。さらに冒頭で述べたごとく、600ページ以上の書籍であるにもかかわらず、多くの注目が集まっていることは、本書が所期の目的を達成したことを意味しているのではないだろうか。

もちろん、この本が高齢者政策にどのような影響力を与えるかの判断には、いささかの時間を要することになる。

## 本書が日本に対して投げかけること

国際的な専門家の中でも、バトラー博士はとりわけ日本の社会保障や福祉のシステムについて、深い造詣があることで知られている。事実、本書は10か所以上で日本について言及している。

「長寿革命」の日本に対するメッセージとは何か。博士は日本の社会保障、医療と福祉のシステムを支える長期的な視野、計画性を、素晴らしいと考えているに違いない。また、日本の予防(Prevention)を重視する視点にも両手を挙げて賛成されるだろう。しかし同時に、さまざまな恵まれた条件下であっても、急速に高齢化する国においては、実行可能な社会政策をつくりだすことは非常に難しい、という警告を投げかけている。

高齢化の課題への取り組みには、単なる制度問題を越えた視点が求められる。

バトラー博士は、生産的(productive)で豊かな高齢期をもたらす社会を構築するためには、私たち一人ひとりが自らの個人としての社会的役割、責任を再検討しなければならないと断言しているのだ。

(翻訳・文責 ILC日本)

## 【\*1】ハインツ賞

慈善事業家テレサ・ハインツにより、彼女の夫である故ジョン・ハインツ上院議員の名誉を称え、1993年に創設された賞。芸術、人文科学、環境、公共政策、保健、科学技術の分野において「人間の最善の在り方」について献身、技術、熱意をもって優れた業績を残した個人に毎年贈られている。